

■■■■氏の研究テーマである「近代日本の文芸翻訳」は、日本近代文学の成立(と形成)を考えるうえでたいへん重要であると考えます。近代文学の出発点に当たる二葉亭四迷は、「小説総論」(1886)に於いて文学作品を Style と Idea に分けて考察してある。つまり、文学作品の2大要素に、表現と内容を見て、その関係性を論じているのである。また、ほぼ時を同じくして森鷗外は、「小説論」(1889)を執筆している。1884～88年にドイツに留学し、ゲーテをはじめとした西洋文学に強く影響を受けた文学論である。二葉亭四迷、森鷗外両氏は、日本の近代文学草創期の先駆者であり、先の二人に坪内逍遙を加えて西洋文学の翻訳から近代文学が成立して行く経緯を識ることは、まさに日本近代文学の源泉を尋ねる重要な研究テーマであると同時に、現代のグローバルな社会に於いて、異文化理解や多様で多義的な価値観を認め合うことの必要性を文学作品の翻訳を通してあらためと再認識することの重要性を包含していると考えます。

■■■■氏の研究は、そうしたスケールの大きい視点を有していると考えます。■■■■の研究は、森鷗外をはじめとする19～20世紀初頭の文学作品や近代文学史の研究であり、お互いに刺戟を与え、二人の現研究に広さと深さを齎すことが期待される。また、■■■■の研究室には、現在15名を超える留学生(大学院生)がおり、文学作品の分析・考察と翻訳のために勉学に勤しんでいる。■■■■氏の研究は、そうした留学生との交流を通して共同研究を可能にする良い機会となると思われる。

現在■■■■は、立命館大学日本文学会(会長)、日本近現代文芸研究会(顧問)、日本文芸学会(常任理事)、国際啄木学会(理事)、近代文学研究会(顧問)など多数の学会、研究会に所属しており、■■■■氏の学内学外での学会・研究会発表や論文投稿の機会を提供することもできる。